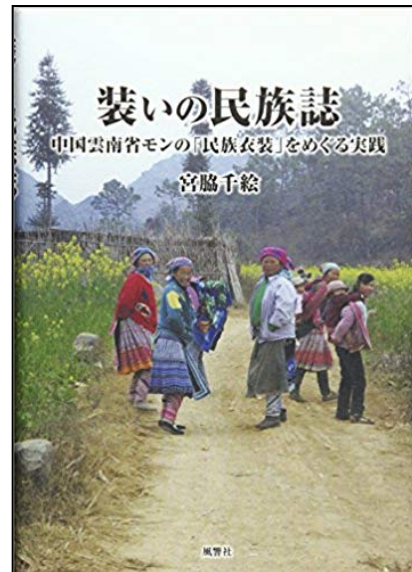


宮脇千絵著『装いの民族誌——中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』、東京、風響社、2017年、372頁、6,000円+税

中尾 世治

本書は、中国雲南省に居住するミャオ族のモンと自称する人びとの「民族衣装」が、現在の状況のなかでいかに変容してきているのかを記述・分析したものである。本書については、中国貴州省ミャオ族の「民族衣装」を研究する佐藤若菜による書評がすでになされ、内容の十全な紹介と「民族衣装」研究の立場からのコメントがなされている（佐藤 2018）。したがって、本書評では、本書の提示する理論に基づいて、本書を積極的に読み込むことで紹介し、本書のもつ人類学一般への貢献の射程を示すことを目的とする。本書は、「民族衣装」研究のみならず、美しさに関連するモノの研究一般に適用可能な理論を含んでいる。本書評では、このことを本書の分析内容とともに、明瞭に浮かびあがらせたい。



まず、本書の理論についてみていこう。序章では、先行研究の理論を整理し、本書の理論的な立場を述べている。おおまかにいえば、先行研究では、衣装の変化は、個人や集団の差異化と、ファッション・デザイナーやファッション・ブランドのグローバル化の2点において捉えられてきた。

たとえば、ヴェブレンの流行概念では、上流階級への下層階級の模倣と上流階級による下層階級との差別化が論じられ、ジンメルは他者との差別化願望と同一化願望の矛盾から流行が生じるとし、あるいは鷺田は、同じようなスタイルに身を包みながらも、アイテムやコーディネートのおおきな差異に自己を表現するといったように論じている（p. 18, 28）。これらは、衣装は差異化において意味をなすとされる。そのうえで、「民族衣装」がエスニック・アイデンティティを表現するもの、言い換えれば、他の「民族」と差異化を図る手段として政治的に規定されるといったことも、先行研究では指摘されてきた（pp. 25-27）。

他方で、グローバル化が進展するなかで、「民族衣装」が固定的ではないという見方が提示された（pp. 20-21）。そのなかでは、「民族衣装」についての文化的な論理が元々のコンテクストから離れて、世界的に流通するようなイメージに置き換えられたり、そのような置き換えを可能とするデザイナーが創造的な活動をしたりしていることが示されてきた（pp. 19-20）。

このように、先行研究では、2つの方向性で議論が進められてきた。一方では、衣装は差異化の手段として変容してきたと論じられてきた。他方では、グローバル化によって、グローバルなイメージへと衣装の意味を転換させるデザイナーを介して衣装が変化してきたと論じられてきた。

それに対して、本書は、グローバル化という政治経済の変容によって衣装の変容を説明するのではなく、差異化の論理を切り分け、より精緻化することで、衣装の変容を社会に内在する論理として浮かび上がらせている。この点が、本書のもつ理論的な射程の大きさである。

具体的には、本書では、「民族衣装」のもつ差異化を、真正性、審美性、規範性の3点に分けて分析をおこなっている(pp. 38-39)。つまり、「民族衣装」では、単に差異化をおこなうのではなく、真正性、審美性、規範性の3点での差異化が生じていると捉えている。これらをわかりやすく読みかえると、真正性とは真なるもの(本当のもの)であること、審美性とは美しいものであること、規範性とは善いものであることといえる。これらは必ずしも一致するわけではない。それでは、「民族衣装」における、真正性、審美性、規範性とは何か。これら3点を念頭において、本書の内容に分け入っていこう。

本書の第1章では、中国内外に居住するモンとそれについての先行研究を概観したうえで、第2章において、清代から新中国成立後にかけてのミャオ族の衣装が漢族によっていかに記述され、民族識別の指標となってきたのかを論じている。漢族は、歴史的にミャオ族に対して衣装の色によって名づけをおこなってきた。中華民国期に5色による分類へと集約化し(pp. 96-98)、この分類体系は中華人民共和国成立以降も継承された(p. 102)。

第2章のタイトルに「民族識別と「民族衣装」の真正性」と掲げているように、漢族からみて、どの色の衣装がミャオ族のサブ・グループの指標として真正なものとされてきたのか、という点が論じられている。つまり、民族識別に用いられてきたことで、それぞれのサブ・グループにとって真正な「民族衣装」というものが歴史的に構築されてきた。

しかし、本書のとりあげる事例の特徴的な点は、こうした真正性が、実際に対象地域で生きる人たちにとっては、ほとんど重要ではなかったということにある(pp. 122-123)。あくまでも、漢族からみた民族識別の指標としての真正性が存在していた、ということであった。特定の民族を表象する「民族衣装」が、真正性に基づいて、政治的に構築されたということだけでは説明できないのである。これが、本書の対象とする事例の大きな特徴の一つである。

真正性に基づいて、衣装のあり方が決定されない。言い換えれば、「本当のモンの衣装」とはこのようなものであるという真正性によって、衣装のあり方が決められているわけではない。しかし、「本当のモンの衣装」という真正性の基準がほとんどないからといって、無秩序に衣装が変化するわけではない。たとえば、衣装がすべて洋服になったわけでもなく、まったく新しいものが出現したわけでもない。それでは、「民族衣装」は、具体的にどのように変容していつているのだろうか。

本書の第3章「衣装の変化の様相」では、モン・ジュアの居住村であるH村の3世代3人の女性が所有する衣装、計233点から文山州のモンの衣装の変容がいかなるものであったのかを詳細に記述し、分析している。これらから分かる大きな特徴は、素材、形態、装飾における変容である。3世代3人の女性が所有する衣装のまとまりという資料の性質の一貫性と、200点を超える資料群としての十分な分量の2点において、本章の衣装の分析は、本書の核心部分に位置づけられるものである。したがって、ここではやや詳細に紹介する。

1980年代以降、衣装の素材は、大麻布から綿布、そして、化繊布へと大きく変化していった(pp. 152-156, 163-164)。形態上の変化は、スカートのパーツ、上衣、前掛け、脚絆に生じている。スカートでは、スカートの腰の部分にあったプリーツがなくなり(p. 153)、トー・ター(スカートの中段部)とタン・ター(スカートの裾付近の部分)の区分が消失している(p. 154)。上衣では襟の変化、前掛けでは幅の縮小化、脚絆は全体として簡素化して足を保護する目的ではなく、単なる装飾へと変化している(pp. 156-159)。

しかし、本書を読む限り、最も大きな変容であり、現在のモンの「民族衣装」を大きく特徴づけているのは、過剰ともいえる装飾化への方向性である。刺繍テープが、スカートのすべてのパーツ、上衣、前掛け、腰帯、脚絆のすべてに用いられるようになった(pp. 153-159)。刺繍面積もタン・ターの部分で増加し(p. 155)、レースがスカートの裾を飾るようになり(p. 155)、上衣には、光沢のある華やかな布地が用いられ、パステル色や蛍光色のもものもあらわれるようになっている(p. 156)。腰帯のなかには、「若者向けの装飾性の強いものでは、臀部に尻尾のような飾りが垂れる」(p. 159)ものがある。端的に言えば、全体として派手になっているのである。

本書では、こうした衣装の変化をいくつかの時期にわけ、その変化の「背景」について述べている。まず、1980年代、大麻から綿への変化と毛糸の増加が生じた(p. 163)。1982年に綿布の配給権が廃止されると、農民も制限なく綿布を入手できるようになり、同時期に毛糸の入手も容易となった(p. 164)。さらに、興味深いことに、1980年代には、ミシンの販売量が5倍から10倍ほどに急増している(p. 164)。

1999年代以降、大麻布や綿布に代わって、化繊布が増加し(p. 164)、2003年以降、刺繍糸の色の顕著な変化が生じた(p. 165)。それ以前の赤色やピンクを基調としたものから、青色を基調とするものへと変化し、それ以降は毎年のように流行の色が変化している(p. 165)。2006年以降、化繊布の使用がますます増え、従来の衣装形態とは異なるものがみられるようになった。特に、スカートでは、シー・ターのプリーツの消失、トー・ターでのクロス・ステッチ布の使用、タン・ターの刺繍の文様ごとの間隔の開きが生じた(p. 165)。これと同時代の変化としては、幹線道路に接続する道の舗装によるアクセスの容易化、各家庭の貯水タンクの設置による水くみ・洗濯の時間短縮、小学校の入学率の増加や出稼ぎの増加が指摘されている(p. 166)。「つまり商品作物の栽培増加によって衣装製作の時間が以前ほど取れなくなったこと、また教育や出稼ぎの機会が増加することで現金収入が増え、多種多様な布地などを入手しやすくなったことが衣装形態やデザインの多様化の理由として挙げられる」(p. 166)。

もつとも、本書では明示的に書かれていないものの、結局のところ、これらの「背景」は、「衣装形態やデザインの多様化の理由」とはならないだろう。たとえば、たしかに、素材の変化(大麻から綿布、化繊布への変化)は、経済や政策の変化によって直接的に生じている。あるいは、一部の形態の変化(シー・ターのプリーツの消失)が、プリーツ作成のための余暇の消失に起因するとはいえる。しかし、衣装全体の過度な装飾化という最も大きな変容は、入手できる布地の種類や現金収入の増加によっては、説明がつかない。購入できるモノの範囲が増えたとして、そのなかでも、なぜ特定のモノを選好し、特定の傾向の変容が生じるのかという問題が残る。つまり、グローバル化を含めた経済や政策の変化は、モンの衣装が変化するための必要条件であっても、十分条件ではない。

こうした特定の傾向をもった変容は、さまざまな変容の可能性があるなかで、何を美しいと思うのかという審美性と、何を善いものと見なすかという規範性によって明らかにされる。そうして本書では、審美性と規範性を論じる後半部分へと記述と分析が進められるのである。

第4章「既製服化による流行と審美性の希求」では、文山市にあるモンの服飾工場と定期市でのモンの衣装販売の様子について詳細な描写がおこなわれ、モンの「民族衣装」の生産と流通の条件とモンの審美性が明らかにされている。

モンの服飾工場での調査からは、生産と流通を大きく条件づける事柄が指摘されている。工場では、生産工程は分業化されているだけでなく、完成品のひな形が存在せず、特に飾りつけはその工程を担う工員各自の自由な判断にまかされている(pp. 181-188)。さらに、「モンの衣装の制作や販売に関して、特定のデザイナーやブランドは存在しておらず、製作者を示すようなブランドタグもつけられていない。特定のデザイナーやブランドが存在していないということは、意図的に流行をつくり発信する者がいないということである。モンの既製衣装は、何か特定の目指すべきモデルや参照されるスタイルがないところで、多くの人に製作され販売されているのである」(p. 195)。つまり、審美性の基準を明確に提示する制度がない。このことこそが、先鋭的に浮かび上がった、この事例の最も大きな特徴である。

しかし、審美性の基準を明確に提示する制度がなかったとしても、審美性が存在していないわけではない。何を美しいと思うのかという審美性を明示的に示す雑誌などのメディアは存在しないが、おおまかに共有された美しさの存在を筆者は報告している。興味深いことに、本書では、既製衣装のモンの「民族衣装」の生産者と消費者の双方において、「新しさ」に重きをおく、類似した語りが見られる。

服飾工場の工場長は、他店にすぐに模倣されるがゆえに、つねに新しいものをつくらなければならないと語り(p. 195)、工員たちも、旧正月の休暇前に自分用の衣装をつくる際には、「どの布が新しいか」、「どの色が他人と同じにならないか」に注意を払う(p. 203)。工場とは別に、家庭内で衣装製作をおこなう女性(1970年生まれ)が(p. 142)、著者のためにスカート等を毎年旧正月につくる際にも、「いつも彼女が思う「新しい」布地を使用してつくってくれていた。そして「これを着ると絶対に周りの人たちが、『なんてきれいなモンの女の子なんだろう』とほめるよ」という。「新しいスタイル」のものは、「きれい」なものでもある」(p. 204)。そして、「その感覚は男性も共有している。華やかな文様のプ

プリントや、きらきらと光沢のある布をみて、男性たちも一様に「きれい」だという。単色や無地の布は「地味で、美しくない」のである」(p. 204)。

モンにおいて衣装の美しさを語る語彙が「きれい」や「新しい」以外に存在しないのかという点は、やや疑問が残るものの、全体として、「新しさ」が蒙の審美性を構成する大きな柱であることは十全に示されている。さらに、派手なプリントや布地を好む感覚がおおよそ共有されており、審美性を構成するもう一つの柱であることがわかる。

本書では論じられていないが、「新しさ」と派手さの関連についてはもう少し議論が展開できる。ここで語られる「新しさ」は布と色と装飾に限定されている。そうした服と色と装飾の選択肢のなかで、派手なものを選択すると、おのずと衣装の変容の方向性がおおまかに定まっていくのではないだろうか。完全に新しいものが求められるのであれば、全く異なる形態の衣装でもよいはずである。たとえば、すべてが洋服に変わるということもありえるだろう。しかし、「蒙の衣装」のおおまかな形態は維持されている。こうしたことから、「新しさ」と派手さを求める審美性という動因が、特定の過剰な装飾へのインヴォリューションを生じさせているとはいえないだろうか。

いずれにしても、おおまかな形態を維持させている別の要因が考えられるだろう。それが、真正性と審美性のつぎに挙げられる規範性である。第5章「葬送儀礼における装いの規範性」と第6章「婚礼衣装における規範性と審美性」では、おおまかな形態を維持させる規範性の側面と、変容を生じさせる審美性と相補的な規範性のあり方が論じられている。

第5章では、変容しない衣装がとりあげられる。死装束は、蒙の世界観のなかでは死者の魂が無事に祖先のもとにたどりつくために、身体とともに腐敗する大麻によって作りあげなければならない(p. 232)。これは、〇〇するのが善い、〇〇するべきである、という規範性が強く働いている事例だろう。

第6章では、婚礼衣装に焦点が当てられている。すでに4章の記述のなかにもあらわれているが、若年層にとって、蒙の「民族衣装」は旧正月や婚礼の際に着る「いわばハレ着」となっている(p. 203, 246, 263)。著者はハレ着を規範性に組み込んでいないが(p. 268)、特に婚礼では「最新の既成衣装を購入するだけの経済力を示す」(p. 246)という規範性が働いている。言い換えれば、婚礼では最新の既成衣装を購入するのが善い、あるいは購入すべきである、という社会規範が一定程度働いている。この点は、「民族衣装」の変容を押し進める、審美性とは別の動因であるといえるだろう。

他方で、婚礼で新婦は、「必ず蒙の衣装を着用しなければならない」(p. 246)。まさに規範性が、蒙の「民族衣装」の形態をおおまかに維持させるように働いている。とはいえ、本書の事例は一筋縄ではいかない。「一方でどのようなモン衣装を着るのかは問題とされない。……新婦が着用するモン衣装はどのようなものでも構わないのだという」(p. 247)。

これをどのように考えればいいのか。第5章の一節には、つぎのように書かれている。「幾人かの人に、「蒙の服の特徴はなんだと思いますか」あるいは「蒙の服であるための条件は何だと思いますか」という質問をしたところ、みなその質問の意図が理解できないといった素振りをみせた」(p. 223)。そして、著者は少数の回答者の考えを紹介し、70代女性による「昔からあるかたちのもの」という回答に答えを見出している(p. 223)。こ

の回答が正しいのかもしれない。しかし、重要な点は、本書第2章で明らかにされたように、モンの「民族衣装」の真正性を明示的に担保する言説やモノが存在しないことにあるように思われる。言い換えれば、何が真正な「モンの服」であるのかを、客体化して語る言説の型や（博物館等で保管され、誰しもが知るような見本となる）具体的なモノが規定されていないのである。

しかし、婚礼で新婦は「必ずモンの衣装を着用しなければならない」という規範は存在する。ハレ着として規範的に求められるのが「モンの衣装」であるために、モンの「民族衣装」は、曖昧であるが、まったく実体のないわけでもない「モンの衣装」を逸脱するようなものには変容していない。たとえば、洋服と同化するような〈新しさ〉は求められていない。したがって、本書の終章で述べられているように、「モンの人びとが着ているのは「民族衣装」と呼ぶことのできるものなのだろうか」という問いに立ち戻ると、モンの「民族衣装」は、そこに備わる真正性、審美性、規範性がさまざまな時空間において柔軟に切り替わりながらあらわれるという意味において「民族衣装」だといえる」(p. 267)。踏み込んでまとめれば、明確な真正性の欠如を前提として、婚礼で「モンの衣装」を着なければならないという規範性がモンの「民族衣装」の外延をゆるやかに構成しつつ、他方で、ハレ着としての規範性と、「新しさ」と派手さを追求する審美性が、モンの「民族衣装」の外延を徐々に押し広げている（新しい「モンの衣装」を次々に生み出している）、という動態がみてとれる。

本書は、先行研究では差異化と一括りにされていたものを、真正性、審美性、規範性という3点に切り分けて、モンの「民族衣装」の動態を捉えたという点で、これまでになく分析をおこなったといえる。また、第3章にまとめられた3世代3人の女性の所有する計233点にわたる衣装の悉皆調査によって、衣装の微細な変容の過程を捉え、その他の章で特定のモデルのないなかでの「民族衣装」の変容という、つかみどころのない現象を、外堀を埋めるようにさまざま状況の記述し、その変容の動因を明らかにしたという点で、貴重な民族誌的記述となっている。

本書が人類学一般に対してもつ大きな射程は、審美性にある。審美性は、既存の人類学の理論では十分に捉えられてこなかった。少なくとも、「民族衣装」研究という美に大きく関連する領域に適応可能な理論は存在しなかった。これまで紹介してきたように、本書の事例で最も重要な点は、審美性である。本書では、明示的なモデルがないものの、ゆるやかに存在している審美的なものを議論する土台を、理論と民族誌的事例の双方で提示している。

特定の集団でゆるやかに共有されているモノやしぐさの美しさ。あるいは、生き様の美しさ。それらの美しさや美しさのあらわれは、文化と呼ばれるものである。この文化を、真正性の政治ではなく、あるいは存在論の世界ではなく、審美性の美において議論する地平を、本書は指し示しているのである。

## 参考文献

佐藤 若菜

2018 「〈書評〉宮脇千絵. 『装いの民族誌——中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』風響社, 2017, 372p.」『東南アジア研究』55 卷 2 号: 412-414。